

浮気妻の制裁

第五卷 白昼の後悔

海老沢 薫 著

内容

- 著作権について
- まえがき
- 第一章 白昼の全裸徘徊
- 海老沢薫 BLOG
- 海老沢薫 Web連載小説

※ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「浮気妻の制裁 第五卷 白昼の後悔」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

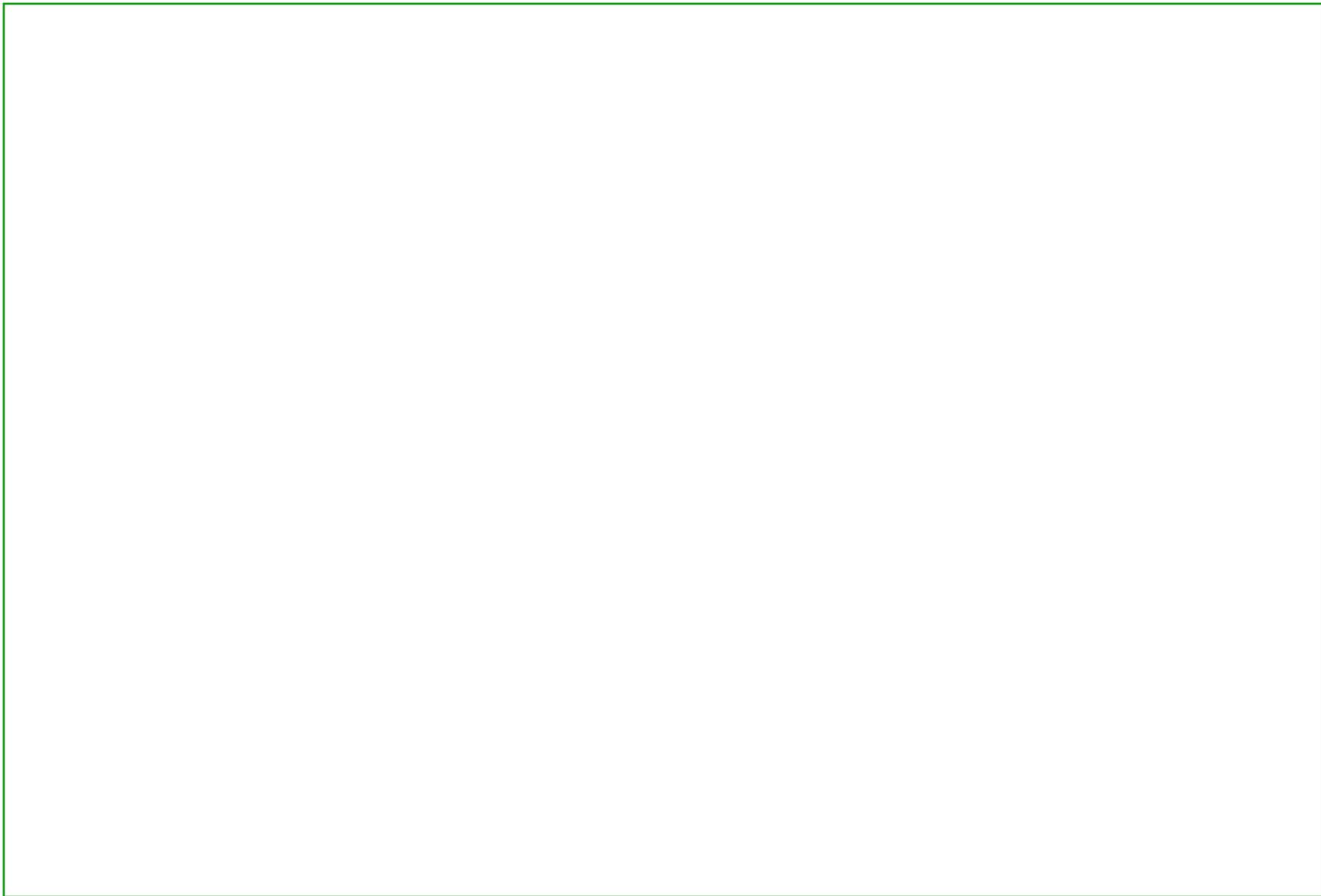
・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダ)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください。

■ まえがき

マンションの隣の部屋に住む主婦、麻子に
よって、一糸纏わぬ姿のまま共用廊下に締め
出されてしまった若妻、萌々。
自宅の扉は鍵が掛かったまま中に入る事
ができず、萌々は一階の郵便受けに鍵を返し
たと言う麻子の言葉を信じて、一糸纏わぬ姿
で非常階段を使って一階へと降りていった。
そうして、どうか誰にも見つからずに郵
便受けに辿り着いた萌々だったが、なんとそ
こには鍵は入っていなかった。
麻子にまんまと騙され、仕方なく一糸纏わ
ぬ姿で来た道を引き返す若妻。
いつ近所の住人に遭遇するかも知れない危
機的な状況の中、萌々はマンションの中をさ
まよい続けるが、このままでは埒が明かない
と悟り、もう麻子に縋りつくしかないと考え
る。
しかし、そんな萌々の前に思いがけない事
態が発生する。なんと麻子がマンションの管

理人を連れて自分を探していることが分かったのだ。麻子は白昼のマンション内に裸の女がうろついていると管理人に告げ、自分の事を完全に変態女に仕立て上げるつもりのようなだった。恐るべき事態を知った萌々は、もう麻子に縋りついて助けを求め、一糸纏わぬ姿のままマンション内を逃げ惑う。やがて、非常階段で麻子達に見つかってしまった萌々は慌てて共用廊下へと逃げ出し、一か八か一糸纏わぬ姿でエレベーターに飛び乗ろうとする。すると、萌々の目の前で停まったエレベーターから配送業者の男が降りてきて、哀れな若妻は見知らぬ男に何ともはしたない姿を見られてしまったのだ。エレベーターに飛び乗った萌々は、どうにか配送業者の男や麻子達から逃げる事ができたのだが・・・。



■ 第一章 白昼の全裸徘徊

二十四歳の若妻、白石萌々は白昼のマンション三階の共用廊下で酷く焦っていた。すぐ目の前には自分の部屋があったが、その扉は鍵が掛かっており、中に入るためには一階にある郵便受けまで鍵を取りに行かなければならなかった。しかし、共用廊下に佇む萌々は糸纏わぬ素っ裸だったのだ。もしも、こんな姿をご近所さんに見られたらと思うと全く生きた心地がせず、かといって素っ裸のまま一階の郵便受けまで降りて行って鍵を取ってくる勇氣もなかった。若妻がこんな絶望的な状況に追い詰められてしまったのは、すべて隣家に住む主婦の麻子の仕業に他ならなかった。萌々の弱みを握る麻子は、若妻に素っ裸で隣の自分の家に来るよう命じ、その際に家の鍵を閉めてくるよう告げた。そして、指示通り素っ裸で自宅に

やっ 鍵を 一階の 郵便受 けに返 したと 言うの だ。
それ から、 麻子は 急用が できた と言っ て、
萌々を 強引に 部屋か ら追い 出し、 部屋の 鍵を
持つて いない 若妻は 共用廊 下に全 裸のまま 放
置され ること になっ たのだ った。
どうし よう・ ・ ・ 。 萌々は 両手で 体を隠 し
周りを キョロキ ョロ見 渡しな がら途 方に暮 れ
た。素 っ裸の まま非 情階段 を使っ て一 階まで
降りて 、再び 上がっ てく りスク を考え れば
隣家の 麻子に 泣きつ いて鍵 を取り に行っ ても
らう方 がまだ マシな ように 思えた 。もし も、
素っ裸 で一階 まで降 りた時 に住人 の誰か に遭
遇でも すれば 、白昼 にマン ション の中を 素っ
裸で徘徊 してい るド変 態女の 烙印を 押され 、
もうこの マンシ ョンで 暮らし 続ける ことは 難
しくなる に違 いなかつ た。
そうし て、麻 子に泣 きつく しか ないと 考え
た萌々 は、もう 一度隣 家の扉 の前ま で行き、
玄関の インター ホンを 鳴らした 。

『ピクソンポクソン』
部屋の中にチャイムが鳴り響くのが聞こえた
が、麻子からの応答はなかった。
どうして出てくれないの・・・麻子は間
違いなく家の中にいるはずなのに、なぜ応答
してくれないのか萌々には分からなかった。
焦った萌々はそれから何度もインターホンを
鳴らしてみたが、一向に部屋の中から応答は
なかった。
そんな・・・萌々はついにはインターホン
を鳴らすのを諦め、絶望感に打ち拉がれた。
きつと麻子は部屋の中のモニターに映る自分
の焦る姿を見て笑っているに違いなかった。
萌々はそれを想像するだけで、どうしようも
ない怒りが胸の奥に沸々と込み上げてくるの
を感じた。
萌々は自分の家の中に入るためには一階まで
降りるしかなかった。大勢の住人が暮らすマ
ンションの中では、廊下やエントランスで他

の住人に遭遇する確率は決して低くはなく、大変なリスクが伴うことは十分に覚悟しなければならなかった。萌々は不安と羞恥によって脚をガクガク震わせながら、共用廊下の端にある非情階段の扉の方へ向かってゆっくりと歩き出した。もしも今、同じ三階に住む住人が廊下に現れれば、萌々はなんと言い訳すれば良いかも分か
らず、とにかく見つからないように急ぐしかな
なかった。共用廊下の端にある扉を開け、非常階段へ
無事辿り着くことができた萌々は少しホッと
した表情を浮かべた。非常階段を使う住人は
ほとんどいないため、これで一階まではどう
にか誰にも見つからずに行くことができそう
に思えた。それでも、素っ裸の萌々は万が一の事を考
え、周囲を警戒しながら慎重に階段を降りて
いった。外からは近隣を走る車の音や生活音

が聞こえ、萌々は自分が今とてつもなく恐ろしい冒険をしている事を思い知らされた。降りた萌々は、ここで最大の難所を迎える事になった。非常階段の踊り場にある扉を開ければ一階の共用廊下へと出て、郵便受けまでのおよそ十メートルの距離を歩かなければならなかった。そこはエントランスから帰ってきた住人がエレベーターホールに向かうために通る道であり、他の住人に遭遇する危険性が極めて高い場所だったのだ。日中は管理人がそこに常駐しているため、下手をすれば管理人に見つかってしまいう恐れもあった。萌々は様々な不安材料が頭の中を過ぎり、なかなか非常階段の扉を開ける事ができなかつた。萌々が一階の非常階段の踊り場に立ち尽くしてから五分、十分と時間が過ぎ

いわ・・・。萌々はついに覚悟を決めると、
ゆつくりと扉を開いていった。廊下が視界
に現れると、萌々はたちまちどうしようもな
い恥ずかしさに襲われた。こんな場所を裸で
歩かなきゃいけないなんて・・・。萌々は下
半身が急激に熱くなるのを感じながら、辺り
に誰もいない事を十分に確認して一階の共用
廊下へと出た。一刻も早く郵便受けに行つて鍵を取り出さ
なければ、いつ誰に見つかつてしまふかも分
からなかつた。萌々は両手で胸元と股間を隠
し、震える脚で共用廊下を駆け出していった。
どうか誰にも見つかりませんように・・・。
萌々は心の中でずっと祈りながら一心不乱に
廊下を駆け抜けた。而して、どうにか郵便受けまで辿り着いた
萌々は、慌てて自分の部屋の郵便受けのダイ
ヤルを回した。ー
えつ・・・

郵便受けを開けた。萌々は思わず驚きの声を漏らした。なんと郵便受けには鍵どころか郵便物さえ入っていない。全くの空っぽだったのだ。萌々はそれを見た瞬間、またしても麻子に嵌められたことを思い知り、言葉にならない憤りを覚えた。しかし、怒ってばかりもいらねなかつた。いつ誰がここにやって来るかも分からず、萌々はとて早く三階に戻る。しかなくかつた。郵便受けを閉めた。萌々は両手で胸元と股間を隠し、周囲を警戒しながら、来た道を戻り始めた。素っ裸で歩いていると思うと、心臓が破裂しそう。なほど鼓動は高鳴り、秘部からは厭らしい蜜が溢れ、脚元へと滴り落ちた。ああん、急がないと。萌々はこんな姿を誰かに見られたらと思うと居ても立って。もいられなかつた。そしてマンション一階の廊下を駆け抜け、どうにか一階の非常階段まで辿り着いた。

そこで一度呼吸を整えた萌々は、このまま三階に戻って麻子の部屋のインターホンを鳴らしたところで、果たして今度は麻子が応答してくれるか不安でならなかった。もしもさっきのように全く応答がなかったら、例えば三階に戻ったところでどうにもならないのだ。萌々は非常階段の一階の踊り場に暫し立ち尽くしたまま、これからどうするべきか考えた。するとその時、非常階段の上の方から人の歩く足音が聞こえてきたのだ。そんな、ウソでしよ・・。萌々は上の方を見上げながら思わず身を竦めた。めったに人が通る事のない非常階段を降りてくる足音、萌々はそれが麻子かも知れないと直感的に思った。萌々は恐怖に震えながらも、麻子がかしきたら助けに来てくれたのではないかと仄かな期待を抱いた。そして、足音はだんだん大きくなり、確実に一階に近づいて来るのが分かった。

「さつき確かに非常階段に裸の女が駆け込む姿が見えたんですよ」
突然、足音に混じって女性の話し声が聞こえ、それは紛れもなく麻子の声だと分かった。
「本当ですか、それは完全に不審者ですね」
続いて聞き覚えのある年輩の男性の声が聞こえ、それはどうやらマンションの管理人のようだった。
えっ、どういう事・・・。萌々は突然非常階段の上から聞こえてきた麻子と管理人の声に動揺を隠せなかった。そして、さつき聞こえた麻子の会話から恐るべき事態が迫ろうとして、いる事を予感した。
階段を降りてくる足音はさらに大きくなり、二階の踊り場を過ぎて一階へと降りてくるのが分かった。どうしよう・・・。このままでは管理人に見つかってしまふと焦った萌々は、非常階段の扉を開け、再び一階の共用廊下に飛び出したのだった。

そうして、非常階段の扉が閉まった瞬間、麻子と管理人の二人が非常階段の一階の踊り場へと辿り着いた。

「一体どこへ行ったのかしら。もしかしてマンションの中を裸で歩き回っているのかも知れないわね。恐いわ。」

「それは大変だ、早く見つけないといけませんんね。」

麻子と管理人は一階の踊り場に誰もいないことを確認すると、萌々の後を追うように非常階段の扉を開けて一階の共用廊下へと出たのだった。

■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 国民のペットへと堕ちていくヒロイン 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 女神の憂鬱 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 女性教諭の前代未聞の不祥事 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>